英文解釈 L01 第 5 講 名詞として働く to・ing のまとまりを読む

学習目標

- to 不定詞・動名詞・疑問詞＋to が作るまとまりの範囲を見極められる。
- まとまり全体が主語・目的語・補語など、文中でどの役割を果たすかを判断できる。
- まとまりの内部と文全体の構造を区別し、行為や選択の内容を自然な日本語に訳せる。

構造図の共通凡例

- **S**：主語。「誰が・何が」に当たる部分。
- **V**：動詞。主節の述語の中心となる部分。下線で示す。
- **O**：目的語。動詞が表す動作などの対象・内容。
- **C**：補語。主語や目的語の内容・状態を説明する部分。
- **M**：修飾語句。時・場所・方法などを補足したり、別の語句を説明したりする部分。

機能括弧：名詞〈〉・形容詞〔〕・副詞()の順に、それぞれ名詞・形容詞・副詞の働きをするまとまりを示す。括弧の内側に別の括弧がある場合は、大きいまとまりに小さいまとまりが含まれていることを表す。

矢印：表示される場合は、説明する語句から説明先への関係を示す。

今回の 3 文では、to 不定詞のまとまり全体が、それぞれ主節の **S・O・C** として働く。内側の a new language は learn の対象だが、主節の O とは限らない。まず外側の役割を確定し、次にまとまり内部の動作と対象を読み取る。

1. 名詞として働く to 不定詞を読む

解説

「何をすることか」を一まとまりで捉える

英文を読むとき、to の後ろに動詞が現れると、そこから新しい動作が始まるように感じることがある。しかし、**to＋動詞の原形から始まるまとまり全体が、文の中で一つの名詞のように働く**場合がある。

例えば、to learn a new language は「新しい言語を学ぶこと」という内容を表す。learn だけで区切るのではなく、その対象である a new language まで含めて一まとまりとして捉えることが重要だ。

このように名詞の働きをする to 不定詞は、文の主語・目的語・補語などの位置に入る。同じまとまりでも、置かれた位置によって文全体との関係が変わる。

① 主語の位置に入る

〈To learn 〈a new language〉〉 takes time .
S V O

S “To learn a new language” / 主語 / to learn a new language 全体が主節の主語。内部では learn が動作を表し、a new language がその対象となる。
V “takes” / 動詞 / takes が主節の述語の中心。
O “time” / 目的語 / time は takes の目的語。

意味：新しい言語を学ぶには時間がかかる。

この文で「時間がかかる」と述べられているのは、何についてだろうか。それは「新しい言語を学ぶこと」だ。

述語の中心となる takes の前にある to learn a new language 全体が主語（S）であり、takes time によって、その行為について説明している。

② 目的語の位置に入る

She　hopes　〈to learn　〈a new language〉〉.
S　V　O

S “She” / 主語 / She が主節の主語であり、学ぶことを願っている人でもある。
V “hopes” / 動詞 / hopes が主節の述語の中心。
O “to learn a new language” / 目的語 / to learn a new language 全体が hopes の目的語。内部では learn が動作を表し、a new language がその対象となる。

意味：彼女は新しい言語を学びたいと願っている。

今度は、文の主語が She、述語の中心が hopes になっている。

hopes の後ろにある to learn a new language は、「何を願っているのか」という内容を表す目的語（O）として働く。

ここでは「学ぶことを願っている」という構造を踏まえ、日本語では「学びたいと願っている」と表すと自然だ。

③ 補語の位置に入る

〈Her goal〉　is　〈to learn　〈a new language〉〉.
S　V　C

S “Her goal” / 主語 / Her goal 全体が主語。goal が中心となる名詞で、Her が誰の目標かを示す。
V “is” / 動詞 / is が主語と補語を結び付ける。
C “to learn a new language” / 補語 / to learn a new language 全体が主語 Her goal の内容を説明する補語。内部では learn が動作を表し、a new language がその対象となる。

意味：彼女の目標は新しい言語を学ぶことだ。

この文では Her goal が主語（S）、is が動詞（V）であり、その後ろの to learn a new language が補語（C）として主語の内容を説明している。

「彼女の目標」と「新しい言語を学ぶこと」が結び付いているため、主語が何であるかを示す関係になる。

3 つの英文から分かること

ここまでの英文では、to learn a new language という同じまとまりを使った。それでも、文全体での働きは主語・目的語・補語と異なっている。

注目すべきなのは、**まとまりの内部での役割と、まとまり全体の役割は別だ**という点だ。

3 文とも、a new language は learn の対象である。一方、to learn a new language 全体の役割は、文の中心となる takes・hopes・is との関係によって決まる。

したがって、to 不定詞を見つけたら、すぐに日本語へ置き換えるのではなく、まずまとまりの終わりを確かめる。そのうえで、文の主語や述語との関係を見れば、何について何を述べているのかが明確になる。

©ミライコーチング

読みの着眼点

名詞として働く to 不定詞を読むときは、次の順序を意識する。

1. **範囲を確定する**：to＋動詞の原形から、必要な目的語や補足語句までを一まとまりとして捉える。
2. **文中の役割を決める**：まとまり全体が主語・目的語・補語のどの位置に入るかを、文の骨格から判断する。
3. **意味を組み立てる**：まとまりの内容を「〜すること」として捉え、文全体との関係を保ちながら自然な日本語に整える。

「〜すること」は意味を捉えるための出発点であり、すべての英文をその形のまま訳す必要はない。

2. 動名詞のまとまりを名詞の位置で読む

解説

ing 形でも、文の中では名詞として働く

動詞の ing 形を見ると、進行形を思い浮かべるかもしれない。しかし、ing 形がいつも進行形の述語になるわけではない。

動名詞は「〜すること」という内容を表し、名詞として働く形だ。動名詞にも動詞としての性質が残るため、後ろに目的語などを伴い、一つのまとまりを作る。

例えば、reading novels は「小説を読むこと」という意味だ。novels は reading の対象であり、reading だけでなく reading novels 全体を捉える必要がある。

では、このまとまりが文中のどこに入るかを比較しよう。

語注：novel「小説」

① 主語の位置に入る

〈Reading novels〉 is fun .
S V C

S “Reading novels” / 主語 / Reading novels 全体が主節の主語。内部では reading が動作を表し、novels がその対象となる。
V “is” / 動詞 / is が主節の述語の中心。Reading は進行形の述語ではない。
C “fun” / 補語 / fun が主語 Reading novels の内容について、楽しいと説明している。

意味：小説を読むことは楽しい。

文の最初にある Reading novels 全体が主語（S）である。is が文の述語の中心（V）であり、fun は主語について述べる補語（C）になっている。つまり、「小説を読むこと」が「楽しい」という関係になっている。

reading を独立した述語と捉えると、文全体の中心である is を見失ってしまう。

解説

② 目的語の位置に入る

I　enjoy　〈reading novels〉.
S　V　O

S “I” / 主語 / I が主節の主語であり、小説を読む動作を行う人でもある。
V “enjoy” / 動詞 / enjoy が主節の述語の中心。「何を楽しむのか」という内容を後ろに取る。
O “reading novels” / 目的語 / reading novels 全体が enjoy の目的語。内部では reading が動作を表し、novels がその対象となる。

意味：私は小説を読むことを楽しんでいる。

この文の主語は I、述語の中心は enjoy だ。その後ろの reading novels 全体が、enjoy の目的語（O）として働く。

「何を楽しんでいるのか」という問いに対し、「小説を読むこと」が答えになる。

③ 補語の位置に入る

〈My hobby〉　is　〈reading novels〉.
S　V　C

S “My hobby” / 主語 / My hobby 全体が主節の主語。hobby が中心となる名詞で、My が誰の趣味かを示す。
V “is” / 動詞 / is が主語と補語を結び付ける。
C “reading novels” / 補語 / reading novels 全体が主語 My hobby の内容を説明する補語。内部では reading が動作を表し、novels がその対象となる。

意味：私の趣味は小説を読むことだ。

My hobby が主語（S）、is が動詞（V）であり、reading novels 全体が補語（C）になる。

ここでは「私の趣味」の内容を「小説を読むこと」が説明している。目的語のように動作の対象を表しているのではなく、主語の内容を示している点が重要だ。

④ 前置詞の後ろに入る

She　is　〔interested　(in　〈reading novels〉)〕.
S　V　C　M

S “She” / 主語 / She が主節の主語であり、小説を読むことに興味を持っている人を表す。
V “is” / 動詞 / is が主節の動詞であり、主語とその状態を説明する補語を結び付ける。
C “interested” / 補語の中心 / interested は主語 She の状態を説明する形容詞。後ろの in reading novels と結び付いて、何に興味があるかを表す。
M “in reading novels” / 前置詞句 → C “interested” / in reading novels 全体が interested の内容を補う前置詞句。内部では reading novels が前置詞 in の目的語であり、主節の目的語 O ではない。reading が動作を表し、novels がその対象となる。

意味：彼女は小説を読むことに興味がある。

この文では、reading novels が前置詞 in の目的語になっている。

ここで区別したいのは、**前置詞の目的語と、主節の目的語（O）は同じものではない**という点だ。

in reading novels 全体は「小説を読むことに」という内容を表す前置詞句であり、形容詞 interested と結び付いて、興味の対象を示している。その内部では reading novels が in の目的語として働く。

文全体は She が主語、is が動詞であり、interested を中心とする部分が主語の状態を説明する。reading novels を主節の目的語（O）として扱うのは適切ではない。

語注：be interested in ～「～に興味がある」

まとまりの外側と内側を分ける

4 つの英文では、いずれも reading novels という同じまとまりを使った。しかし、その役割は主語・目的語・補語・前置詞の目的語と異なっている。

また、内部では reading が novels を対象に取るという関係が共通している。

動名詞を読むときは、まず動名詞から始まるまとまりの範囲を決め、そのまとまりが文全体、または前置詞句の中でどんな役割を担うかを確認する。この順序なら、ing 形を見ただけで進行形と決めつけずに読める。

動名詞の読み方

動名詞は「～すること」を表し、名詞の働きをする。主語・目的語・補語に加え、前置詞の目的語にもなる。

- **まとまりの内部**：動名詞が何を対象とし、どこまでが一つの内容かを確認する。
- **まとまりの外側**：その内容が主語・目的語・補語のどこに入るかを確かめる。
- **動名詞が前置詞の目的語になる場合**：前置詞とその後ろの動名詞のまとまりで前置詞句を作り、前置詞句全体がさらに外側の語句と関係を作る。

ing 形という見た目だけでは役割を決められない。文の述語を確定し、まとまりの境界と位置から判断することが大切だ。

3. for を伴う to 不定詞の意味上の主語を読む

解説

「誰がすることか」を確かめる

to 不定詞が表す動作は、必ずしも文全体の主語が行うとは限らない。

例えば「生徒たちが英語を学ぶこと」と表したい場合、to learn English だけでは、その動作を誰が行うのかが明示されていない。

このようなとき、**for＋名詞＋to 不定詞**の形で、動作を行う人を明示できる。to 不定詞の動作を行う人や物を、その不定詞の「意味上の主語」という。

重要なのは、動作を行う人と、まとまり全体が文中で担う役割を区別することだ。

英文で確かめる

〈Our goal〉 is 〈for 〈all students〉 to understand 〈the lesson〉〉.
S V C

S “Our goal” / 主語 / Our goal 全体が主節の主語。goal が中心となる名詞で、Our が誰の目標かを示す。
V “is” / 動詞 / is が主節の動詞であり、主語と補語を結び付ける。
C “for all students to understand the lesson” / 補語 / for all students to understand the lesson 全体が主節の補語として Our goal の内容を説明する。内部では all students が understand という動作の意味上の主語であり、the lesson がその対象となる。all students は主節の主語ではない。for all students だけを通常の前置詞句として切り離さない。

意味：私たちの目標は、生徒全員がその授業の内容を理解することだ。

語注：goal「目標」、understand「理解する」、lesson「授業」

まず文全体の骨格を見る。Our goal が主語（S）、is が動詞（V）であり、for all students to understand the lesson 全体が補語（C）になっている。

つまり、「私たちの目標」の内容を、for から始まるまとまり全体が説明している。

一方、そのまとまりの内部では、understand the lesson という動作を行うのは all students だ。Our goal が理解するわけではなく、生徒全員が理解するのである。

ここで all students を文全体の主語（S）として扱ってはいけない。**all students は to 不定詞の意味上の主語であり、まとまり全体は主節の補語（C）**という別々の役割を持つ。

また、for all students だけを「生徒全員のために」という普通の前置詞句として切り離すのも適切ではない。この文では、for all students to understand the lesson までを一つの名詞的なまとまりとして捉える必要がある。

外側と内側を分けて読む

この構造では、まず for から始まるまとまりの終わりを確かめ、文全体での役割を判断する。その後、for の後ろの名詞と to 不定詞の動作を結び付ければ、誰が何をするのかを正確に読み取れる。

意味上の主語と文中の役割

for＋名詞＋to 不定詞では、for の後ろの名詞が to 不定詞の動作を行う人や物を表す。

- **まとまりの内部**：誰が to 不定詞の動作を行うのかを確認する。
- **まとまりの外側**：for＋名詞＋to 不定詞全体が文中でどの役割を担うかを確認する。

意味上の主語を、主節の主語（S）と混同しない。また、for を見ただけで普通の前置詞句と決めず、後ろの to 不定詞まで含めた関係から判断する。

4. 疑問詞＋to の名詞的なまとまりを読む

解説

疑問詞から始まる内容を一まとまりで捉える

英文の中には、what・how・where などの疑問詞の後ろに、to 不定詞が続く形がある。

この形は、疑問詞が表す内容と to 不定詞の動作を結び付け、「何を～するか」「どのように～するか」「どこで～するか」などを表す。

英文解釈で重要なのは、**疑問詞だけを切り離さず、疑問詞から to 不定詞の終わりまでを一つの名詞的なまとまりとして読むこと**だ。

まとまり全体は、文の目的語や補語などの位置に入る。

① 目的語の位置に入る

She knows 〈how to use 〈this camera〉〉.
S V O

S “She” / 主語 / She が主節の主語であり、カメラの使い方を知っている人を表す。
V “knows” / 動詞 / knows が主節の述語の中心。後ろに知っている内容を取る。
O “how to use this camera” / 目的語 / how to use this camera 全体が knows の目的語。内部では how が use の方法を表し、this camera が use の対象となる。how だけを主節の目的語として切り離さない。

意味：彼女はこのカメラの使い方を知っている。

語注：camera「カメラ」

まず、文全体の主語（S）は She、述語の中心（V）は knows だ。

その後ろの how to use this camera 全体が、knows の目的語（O）になっている。「何を知っているのか」という問いに対し、「このカメラをどのように使うか」という内容が答えになる。

まとまりの内部では、how が use の方法を表し、this camera が use の対象になっている。

したがって、how だけを「どのように」と訳して終えるのではなく、use this camera と結び付けて「このカメラの使い方」と捉える。

② 補語の位置に入る

〈The question〉 is 〈where to put 〈the new desk〉〉.
S V C

S “The question” / 主語 / The question 全体が主節の主語。question が中心となる名詞で、The がその問いを特定している。
V “is” / 動詞 / is が主節の動詞であり、主語と補語を結び付ける。
C “where to put the new desk” / 補語 / where to put the new desk 全体が主節の補語として The question の内容を説明する。内部では where が put という動作の場所を表し、the new desk が put の対象となる。where だけを補語として切り離さない。

意味：問題は、新しい机をどこに置くかということだ。

語注：question「問題、疑問」、put「置く」、desk「机」

この文では、The question が主語（S）、is が動詞（V）であり、where to put the new desk 全体が補語（C）として主語の内容を説明している。

まとまりの内部を見ると、put the new desk は「新しい机を置く」という動作と対象の関係を作っている。where は、その机を置く場所を表す。

「どこに置くか」という内容全体が、文の主語である The question の中身になっているのである。

疑問詞によって、動作のどの内容を示すかが変わる

例えば、同じ use という動詞でも、疑問詞との結び付きによって表す内容が異なる。

- what to use：「何を使うか」――使う対象
- how to use it：「それをどのように使うか」――使う方法
- where to use it：「それをどこで使うか」――使う場所

このように、疑問詞が動作のどの部分を表しているかを確かめると、まとまりの内容が読み取りやすくなる。

ただし、疑問詞＋to が常に未来の行動や義務を表すわけではない。英文中の動詞や文脈に合わせて意味を決める必要がある。

外側の役割と内部の意味を区別する

最初の英文では how to use this camera 全体が目的語、次の英文では where to put the new desk 全体が補語だった。

どちらも、疑問詞と to 不定詞が結び付いて内容を作り、そのまとまり全体が文の中で名詞として働いている。

まず外側の文でまとまりの位置を確かめ、次に内部で「何を・どのように・どこで」などの関係を読み取る。この順序で考えると、疑問詞の意味と文全体の構造を混同せずに訳せる。

疑問詞＋to の読み方

疑問詞＋to 不定詞は、疑問詞から to 以下の必要な語句までを一まとまりとして捉える。

- **まとまりの内部**：疑問詞が動作の対象・方法・場所など、何を表すかを確認する。
- **まとまりの外側**：全体が主節の目的語・補語など、どの名詞位置に入るかを確認する。

疑問詞だけを訳して終わらず、後ろの動詞と結び付けて内容を確定することが重要だ。

---

5. 例題 1

1

語注

- decide（decided）「決める」
- share「共有する」
- result「結果」
- experiment「実験」

英文

The students decided to share the results of their experiment with their classmates.

設問

a. 英文中の to 不定詞が作るまとまりの範囲を示し、そのまとまり全体が文中で担う名詞としての役割を答えよ。

b. 英文全体を、構造と意味の関係を保って自然な日本語に訳せ。

解説

a. 構造の確認

to 不定詞が作るまとまりは、**to share the results of their experiment with their classmates** であり、文全体では動詞 decided の目的語（O）として働いている。

まず、文の主語（S）は The students、述語の中心（V）は decided である。

decided は「決めた」という意味だが、何を決めたのかは、この 1 語だけでは分からない。その内容を表しているのが、decided の後ろに続く to 不定詞のまとまりだ。

まとまりの内部では、share の対象が the results of their experiment であり、with their classmates が共有する相手を示している。

したがって、to share だけで区切らず、文末の their classmates までを含めて「自分たちの実験結果をクラスメートと共有すること」という一つの内容として捉える。

〈The students〉 decided
S V

〈to share 〈the results 〔of 〈their experiment〉〕〉 (with 〈their classmates〉)〉.
O

S “The students” / 主語 / The students 全体が主節の主語。decided の動作主であり、to 不定詞内部の share を行う主体でもある。
V “decided” / 動詞 / decided が主節の述語の中心。過去形であり、後ろの to 不定詞が決定した内容を表す。
O “to share the results of their experiment with their classmates” / 目的語 / to share the results of their experiment with their classmates 全体が decided の目的語。内部では share が動作を表し、the results of their experiment が共有する対象となる。of their experiment は results を説明し、with their classmates は share に結び付いて共有する相手を示す。their experiment と their classmates の their は主語 The students を指す。

b. 全文和訳 直訳 その生徒たちは、自分たちの実験の結果をクラスメートと共有することを決めた。

満点の訳 生徒たちは、自分たちの実験結果をクラスメートと共有することにした。

直訳では、to 不定詞の名詞的な内容を「〜すること」として表している。

自然な訳では、「共有することを決めた」を「共有することにした」と自然な日本語に整えた。決定した内容や、誰が誰と何を共有するのかという関係は変わっていない。

読む手順

この英文では、最初に The students decided という主節の骨格を確定する。

次に、decided の後ろにある to 不定詞が何を決めたのかを表していることに注目し、その内容がどこまで続くかを確認する。

最後に、to 不定詞のまとまり全体を decided の目的語として結び付ければ、文全体の意味が完成する。

to 不定詞の内部で何が行われるかと、そのまとまり全体が主節でどんな役割を持つかを分けて考えることが、この英文を正確に読むためのポイントだ。

6. 例題 2

2

語注

- summary「要約」
- habit「習慣」
- useful「役に立つ、有益な」

英文

Writing a short summary after each history lesson is a useful habit for many high school students.

設問

a. 英文中の Writing が作る動名詞のまとまりの範囲を示し、そのまとまり全体が文中で担う名詞としての役割を答えよ。

b. 英文全体を、構造と意味の関係を保って自然な日本語に訳せ。

解説

a. 構造の確認

動名詞が作るまとまりは、**Writing a short summary after each history lesson** であり、文全体では主語（S）として働いている。

まず、文の述語の中心（V）となる is を見つける。その前にある Writing a short summary after each history lesson 全体が、「何が役に立つ習慣なのか」を表している。

まとまりの内部では、Writing の対象が a short summary であり、after each history lesson が要約を書く時を示している。

したがって、Writing だけで区切らず、after each history lesson までを含めて「歴史の授業が終わるたびに短い要約を書くこと」という一つの内容として捉える。

一方、is の後ろにある a useful habit for many high school students は補語（C）であり、主語の内容について「多くの高校生にとって役に立つ習慣だ」と説明している。

この文の Writing は進行形の述語ではない。文全体の述語の中心は is であり、Writing から始まるまとまり全体が、その前に置かれた主語になっている。

〈Writing 〈a short summary〉 (after 〈each history lesson〉)〉 is
S V

〈a useful habit (for 〈many high school students〉)〉.
C

S “Writing a short summary after each history lesson” / 主語 / Writing a short summary after each history lesson 全体が主節の主語。内部では Writing が動作を表し、a short summary がその対象となる。after each history lesson は要約を書く時を示し、Writing に結び付く。Writing は主節の進行形の述語ではない。
V “is” / 動詞 / is が主節の動詞であり、主語と補語を結び付ける。
C “a useful habit for many high school students” / 補語 / a useful habit for many high school students 全体が主節の補語。主語の行為を有益な習慣として説明する。for many high school students は、誰にとって useful なのかを示す表現として解釈し、useful の意味を補う。many high school students はその前置詞 for の目的語となる名詞句であり、主節の目的語ではない。

©ミライコーチング

b. 全文和訳

直訳

それぞれの歴史の授業の後に短い要約を書くことは、多くの高校生にとって役に立つ習慣である。

満点の訳

歴史の授業が終わるたびに短い要約を書くことは、多くの高校生にとって有益な習慣だ。

直訳では、Writing から始まる動名詞のまとまりを「〜を書くこと」として表し、主語と補語の関係をそのまま日本語に反映している。

自然な訳では、after each history lesson を「歴史の授業が終わるたびに」と自然に整えた。each が表す「毎回」という意味を保ち、a short summary の「短い要約」、many high school students の「多くの高校生」という数量・限定の情報も落としていない。

読む手順

この英文では、最初に is という文の述語の中心を確定する。

次に、その前にある Writing から始まる部分を確認する。Writing の対象である a short summary と、時を表す after each history lesson までを一まとまりとして捉えれば、文全体の主語が確定する。

最後に、is の後ろの補語と結び付け、「何をすること」が「どのような習慣なのか」という関係を日本語に反映する。

動名詞の内部で何をするのかと、そのまとまり全体が文の中でどんな役割を持つのかを分けて考えることが、主語になる動名詞句を正確に読むためのポイントだ。

7. 例題 3

3

語注

- student council「生徒会」
- discuss（discussed）「話し合う」
- reduce「減らす」
- food waste「食品ロス、食品の無駄」
- cafeteria「食堂」

英文

The student council discussed how to reduce food waste in the school cafeteria.

設問

a. 英文中の how から始まる疑問詞＋to 不定詞のまとまり全体の範囲を示し、そのまとまりが文中で担う名詞としての役割を答えよ。

b. 英文全体を、構造と意味の関係を保って自然な日本語に訳せ。

解説

a. 構造の確認

疑問詞＋to 不定詞が作るまとまりは、**how to reduce food waste in the school cafeteria** であり、文全体では動詞 discussed の目的語（O）として働いている。

まず、主節の主語（S）は The student council、述語の中心（V）は discussed である。

discussed は「話し合った」という意味だが、何について話し合ったのかは、この部分だけでは分からない。その内容を表しているのが、後ろに続く how から始まるまとまりだ。

まとまりの内部では、reduce の対象が food waste であり、in the school cafeteria が食品ロスを減らす場所を示している。

さらに、how は reduce という動作の方法を表す。つまり、「学校の食堂で食品ロスをどのように減らすか」という内容になっている。

ここでは how だけを切り離したり、how to reduce だけで区切ったりしない。文末の cafeteria までを含めた全体が、discussed の目的語として働いている。

〈The student council〉 discussed
S V

〈how to reduce 〈food waste〉 (in 〈the school cafeteria〉)〉.
O

S “The student council” / 主語 / The student council 全体が主節の主語。話し合いを行った主体を表す。
V “discussed” / 動詞 / discussed が主節の述語の中心。過去形であり、後ろの疑問詞＋to 不定詞が話し合った内容を表す。実際に食品ロスが減ったことまでは示していない。
O “how to reduce food waste in the school cafeteria” / 目的語 / how to reduce food waste in the school cafeteria 全体が discussed の目的語。内部では how が reduce の方法を表し、food waste が reduce の対象となる。in the school cafeteria は reduce に結び付き、食品ロスを減らす場所を示す副詞的な前置詞句として読む。話し合いが行われた場所を直接示すものとしては扱わない。

b. 全文和訳 直訳 生徒会は、学校の食堂で食品の無駄をどのように減らすかを話し合った。

満点の訳 生徒会は、学校の食堂での食品ロスを減らす方法について話し合った。

直訳では、how が表す「どのように」という方法の意味を明示し、疑問詞＋to 不定詞のまとまり全体を discussed の目的語として訳している。

自然な訳では、「どのように減らすか」を「減らす方法」と表現した。どちらも、話し合いの対象が食品ロスを減らす方法であるという関係を保っている。

また、discussed は過去形なので、「話し合った」と訳す。話し合いの結果、実際に食品ロスが減ったとは述べられていないため、そのような情報は加えない。

読む手順

最初に、The student council discussed という主節の骨格を確定する。

次に、discussed の後ろにある how から始まる部分を確認する。how を reduce と結び付け、food waste という対象と in the school cafeteria という場所まで含めて、一つの内容として捉える。

最後に、そのまとまり全体を discussed の目的語として結び付ければ、「何について話し合ったのか」が明確になる。

疑問詞がまとまりの内部で表す意味と、そのまとまり全体が主節で担う役割を区別することが、疑問詞＋to 不定詞を正確に読むためのポイントだ。

8. 演習問題

1

語注

・policy「方針」
・offer「提供する」
・admission「入場、入館」
・throughout「〜の間ずっと」

英文

The local museum's new policy is to offer free admission on Sunday mornings throughout the winter.

設問

a. 英文中の to 不定詞が作る名詞的なまとまりの範囲を示し、そのまとまり全体が文中で担う名詞としての役割を答えよ。

b. 英文全体を、構造と意味の関係を保って自然な日本語に訳せ。

2

語注

- follow「（規則などに）従う」
- important「重要な、大切な」
- practice「練習」

英文

For every player to follow the same safety rules is important during team practice.

設問

a. 英文中の for から始まる to 不定詞の名詞的なまとまりについて、for を含む範囲全体を示し、そのまとまりが文中で担う名詞としての役割を答えよ。

b. 英文全体を、構造と意味の関係を保って自然な日本語に訳せ。

3

語注

- autumn festival「秋祭り」
- lantern「ちょうちん」

英文

During the autumn festival, the local children enjoyed making colorful paper lanterns.

設問

a. 英文中の making が作る動名詞のまとまりの範囲を示し、そのまとまり全体が文中で担う名詞としての役割を答えよ。

b. 英文全体を、構造と意味の関係を保って自然な日本語に訳せ。

4

語注

- gardener「庭師」
- protect（protected）「守る、保護する」
- root「根」
- cover「覆う」

英文

The gardeners protected the young trees in the park by covering their roots with dry leaves.

設問

a. 英文中の covering から始まる動名詞のまとまりの範囲を示し、そのまとまりがどの語とどのような名詞的関係を作っているかを答えよ。

b. 英文全体を、構造と意味の関係を保って自然な日本語に訳せ。

©ミライコーチング

5

語注

- pack「荷物を詰める、荷造りする」
- training camp「合宿」

英文

At the morning meeting, the coach explained what to pack for the weekend training camp.

設問

a. 英文中の what から始まる疑問詞＋to 不定詞のまとまり全体の範囲を示し、そのまとまりが文中で担う名詞としての役割を答えよ。

b. 英文全体を、構造と意味の関係を保って自然な日本語に訳せ。

6

語注

- planning meeting「計画会議」
- install「設置する」
- bicycle rack「駐輪用ラック」

英文

The main question at the planning meeting was where to install the new bicycle racks.

設問

a. 英文中の where から始まる疑問詞＋to 不定詞のまとまり全体の範囲を示し、そのまとまりが文中で担う名詞としての役割を答えよ。

b. 英文全体を、構造と意味の関係を保って自然な日本語に訳せ。

©ミライコーチング

演習問題の解答・解説

1

a. 構造の確認

to 不定詞が作るまとまりは、**to offer free admission on Sunday mornings throughout the winter** であり、文全体では補語（C）として働いている。

まず、主節の主語（S）は The local museum's new policy、動詞（V）は is である。

主語は「地元の博物館の新しい方針」を表す。しかし、方針の具体的な内容は、主語と動詞だけでは分からない。その内容を説明しているのが、is の後ろに続く to 不定詞のまとまりだ。

まとまりの内部では、offer の対象が free admission であり、「無料の入館を提供する」という内容を作っている。

さらに、on Sunday mornings は「日曜日の午前中に」という時を表し、throughout the winter は「冬の間ずっと」という期間を示している。

したがって、to offer free admission だけで区切らず、文末の throughout the winter までを含めて一つの内容として捉える。

この内容全体が、主語である「博物館の新しい方針」の中身を説明しているため、主節の補語（C）と判断できる。

〈〔The local museum's〕 new policy〉 is
S V
〈to offer 〈free admission〉 (on 〈Sunday mornings〉) (throughout 〈the winter〉)〉.
C

S “The local museum's new policy” / 主語 / The local museum's new policy 全体が主節の主語。policy が中心となる名詞で、The local museum's がどの博物館の方針かを示す。
V “is” / 動詞 / is が主節の動詞であり、主語と補語を結び付ける。
C “to offer free admission on Sunday mornings throughout the winter” / 補語 / to offer free admission on Sunday mornings throughout the winter 全体が主節の補語として、新しい方針の内容を説明する。内部では offer が動作を表し、free admission が提供する対象となる。on Sunday mornings は無料入館を提供する曜日と時間帯を示し、throughout the winter はその期間を示す。方針の内容を述べており、実際に無料入館が実施されたことまでは示さない。

b. 全文和訳

直訳

地元の博物館の新しい方針は、冬の間ずっと日曜日の午前中に無料の入館を提供することだ。

満点の訳

地元の博物館の新しい方針は、冬の間、毎週日曜日の午前中に入館を無料にすることだ。

直訳では、to 不定詞の内容を「〜すること」として表し、主語と補語の関係をそのまま日本語に反映している。

自然な訳では、offer free admission を「入館を無料にする」と整えた。また、on Sunday mornings と throughout the winter を組み合わせ、冬の期間中の日曜日の午前中を対象とする方針だと分かるようにしている。

ここで述べられているのは、新しい方針の内容である。実際に無料入館が始まったかどうかは、この英文からは分からないため、実施済みの事実として訳さない。

読み方のポイント

この英文では、is を中心に主節の骨格を確定し、その後ろの to 不定詞が何を説明しているかを確認する。

to 不定詞の内部に時や期間を表す語句が続いていても、それらを含めた内容全体が主語の内容を説明している。

to 不定詞のまとまり全体が何の内容を示しているかを確かめれば、補語としての働きを捉えられる。

2

a. 構造の確認

to 不定詞が作る名詞的なまとまりは、**For every player to follow the same safety rules** であり、文全体では主語（S）として働いている。

まず、主節の動詞（V）は is であり、important が補語（C）になっている。

つまり、文全体は「何が重要なのか」を述べる構造だ。その「何が」に当たるのが、文頭の For から始まるまとまり全体である。

次に、まとまりの内部を確認する。

to follow the same safety rules は「同じ安全規則に従うこと」という内容を表している。

この動作を行うのは、for の後ろにある every player だ。every player は to follow の意味上の主語であり、「選手一人ひとりが規則に従う」という関係を作っている。

ここで、**every player だけを主節の主語（S）として扱ってはいけない**。主節の主語は、For から rules までの内容全体である。

また、the same safety rules は follow の対象であり、same によって、選手たちがそれぞれ異なる規則ではなく、同じ規則に従うことが示されている。

文末の during team practice は「チーム練習中に」という時を表し、主節で述べられている重要性がどの場面についてのものかを示している。

したがって、文全体では「選手全員が同じ安全規則に従うこと」が、チーム練習中に「重要である」という意味になる。

〈For 〈every player〉 to follow 〈the same safety rules〉〉 is important
S V C

(during 〈team practice〉).
M

S “For every player to follow the same safety rules” / 主語 / For every player to follow the same safety rules 全体が主節の主語。内部では every player が follow という動作の意味上の主語であり、the same safety rules がその対象となる。every は選手一人ひとりを対象とし、the same は共通の安全規則を示す。every player だけを主節の主語として切り出さず、for から rules までを一つの名詞的なまとまりとして捉える。
V “is” / 動詞 / is が主節の動詞であり、主語全体と補語 important を結び付ける。
C “important” / 補語 / important が主語の内容について「重要である」と説明する。「不可欠である」など、原文より強い意味にはしない。
M “during team practice” / 時・場面 → C “important” / during team practice 全体が、主節で述べられる重要性が当てはまる場面を示す副詞的な前置詞句。team practice は during の目的語となる名詞句であり、to follow の対象には含まれない。

b. 全文和訳 直訳 すべての選手が同じ安全規則に従うことは、チーム練習中に重要である。

満点の訳 チームでの練習中は、選手一人ひとりが同じ安全上のルールを守ることが重要だ。

直訳では、For every player to follow the same safety rules 全体を主語として捉え、「〜することは重要である」という構造を日本語に反映している。

自然な訳では、every player を「選手一人ひとり」と表すことで、全員が対象であることを明確にした。

また、follow the same safety rules を「同じ安全上のルールを守る」と整えた。the same が表す共通性を保ち、during team practice が示す「チーム練習中」という時の条件も落としていない。

important は「重要な」という意味であり、「不可欠だ」「必ず守らなければならない」といった、原文より強い判断や義務を加える必要はない。

読み方のポイント

この英文では、文頭の For を見たときに、every player だけを主語として切り出さないことが重要だ。

まず、For から to 不定詞の終わりまでを一まとまりとして捉え、その全体を is important という主節の述部に結び付ける。

次に、まとまりの内部で、every player が follow という動作を行い、the same safety rules がその対象になることを確認する。

まとまり全体が主節で担う役割と、その内部で誰が動作を行うかを区別することで、for を伴う to 不定詞を正確に読み取れる。

3

a. 構造の確認

動名詞が作るまとまりは、**making colorful paper lanterns** であり、文全体では動詞 enjoyed の目的語（O）として働いている。

まず、文の中心となる主語（S）は the local children、述語の中心（V）は enjoyed である。

enjoyed は「楽しんだ」という意味だが、何を楽しんだのかは、この動詞だけでは分からない。その内容を表しているのが、後ろに続く making から始まるまとまりだ。

まとまりの内部では、making が「作る」という動作を表し、colorful paper lanterns がその対象になっている。

colorful は「色鮮やかな」、paper は「紙製の」という意味で、どちらも lanterns を説明している。したがって、making だけで区切らず、lanterns までを含めて「色鮮やかな紙製のちょうちんを作ること」という一つの内容として捉える。

一方、文頭の During the autumn festival は「その秋祭りの間に」という時を表す前置詞句であり、主節の出来事がいつ起きたかを示している。

この部分は動名詞のまとまりには含まれない。**何を楽しんだのかという内容と、いつ楽しんだのかという時の情報を区別する**ことが重要だ。

また、enjoyed は過去形であり、子どもたちが楽しんだという出来事は過去のものとして述べられている。

〔During 〈the autumn festival〉〕(M), 〈the local children〉(S) enjoyed(V)

〈making 〈colorful paper lanterns〉〉(O).

M “During the autumn festival” / 時 → V “enjoyed” / During the autumn festival 全体が、主節の enjoyed で表される出来事の時を示す副詞的な前置詞句。the autumn festival は During の目的語となる名詞句。文頭のこの部分は、making から始まる動名詞のまとまりには含まれない。
S “the local children” / 主語 / the local children 全体が主節の主語。children が中心となる名詞で、local が地元の子どもたちであることを示す。
V “enjoyed” / 動詞 / enjoyed が主節の述語の中心。過去形であり、後ろの動名詞のまとまりが楽しんだ内容を表す。
O “making colorful paper lanterns” / 目的語 / making colorful paper lanterns 全体が enjoyed の目的語。内部では making が動作を表し、colorful paper lanterns がその対象となる。colorful は色鮮やかであること、paper は紙製であることを示し、いずれも lanterns を説明する。making は主節の進行形の述語ではない。

b. 全文和訳

直訳

その秋祭りの間、地元の子どもたちは色鮮やかな紙製のちょうちんを作ることを楽しんだ。

満点の訳

その秋祭りの期間中、地元の子どもたちは色鮮やかな紙のちょうちん作りを楽しんだ。

直訳では、making colorful paper lanterns を「色鮮やかな紙製のちょうちんを作ること」として表し、その内容が enjoyed の対象であることを明確にしている。

自然な訳では、「ちょうちんを作ることを楽しんだ」を「ちょうちん作りを楽しんだ」と整えた。

どちらの訳でも、the local children が表す「地元の子どもたち」、colorful と paper によるちょうちんの説明、During the autumn festival が示す時の情報を保持している。

また、enjoyed の過去の意味を「楽しんだ」として反映している。ちょうちんを完成させたかどうかや、祭りでどのような催しが行われたかについては、英文にない情報を加えていない。

読み方のポイント

この英文では、最初に文頭の During the autumn festival を時の情報として捉え、主節の the local children enjoyed という骨格を確定する。

次に、enjoyed の後ろにある making に注目する。making が独立した述語ではなく、後ろの colorful paper lanterns とともに「何を楽しんだのか」を表していることを確認する。

最後に、この動名詞のまとまり全体を enjoyed の目的語として結び付ければ、文全体の意味が完成する。

動名詞の内部にある動作と対象の関係を確認したうえで、まとまり全体を主節の動詞に結び付けることが、目的語になる動名詞句を読む基本となる。

4

a. 構造の確認

動名詞が作るまとまりは、**covering their roots with dry leaves** であり、前置詞 by の目的語として働いている。

まず、主節の主語（S）は The gardeners、述語の中心（V）は protected、目的語（O）は the young trees in the park である。

この文では、in the park を直前の the young trees に結び付け、「公園にある若い木々」と読む。

ここまでで、「庭師たちは公園にある若い木々を保護した」という主節の骨格が確定する。

では、どのような方法で木々を保護したのだろうか。その方法を説明しているのが、by covering their roots with dry leaves という前置詞句だ。

この前置詞句の内部では、covering their roots with dry leaves 全体が by の目的語になっている。

さらに、動名詞のまとまりの内部を確認すると、covering は「覆う」という動作、their roots はその対象、with dry leaves は覆うために使うものを表している。

ここで、their が指しているのは the young trees である。つまり、覆われたのは庭師たちのものではなく、保護の対象である若い木々の根だ。

また、dry leaves は「乾いた葉」を意味する。葉が落ちていたか、枯れていたかは英文から確定できないため、「落ち葉」「枯れ葉」とは断定しない。

covering their roots with dry leaves は主節の目的語（O）ではなく、前置詞 by の目的語である。

by を含む前置詞句全体は、「木々の根を乾いた葉で覆うことによって」という手段を表し、主節の protected という動作を説明している。

このように、前置詞句全体の役割と、その内部にある動名詞のまとまりの役割を区別する必要がある。

〈The gardeners〉 protected 〈the young trees 〔in 〈the park〉〕〉
S V O

(by 〈covering 〈their roots〉 (with 〈dry leaves〉)〉).
M

S “The gardeners” / 主語 / The gardeners 全体が主節の主語。庭師たちが protected の動作を行う主体であり、covering で表される動作も行う。
V “protected” / 動詞 / protected が主節の述語の中心。過去形であり、若い木々を保護したことを表す。
O “the young trees in the park” / 目的語 / the young trees in the park 全体が protected の目的語。中心となる名詞は trees であり、the young が対象を限定する。in the park は trees を後ろから説明し、公園にある若い木々を表す。the park は前置詞 in の目的語となる名詞句。
M “by covering their roots with dry leaves” / 手段 → V “protected” / by covering their roots with dry leaves 全体が protected の手段を表す副詞的な前置詞句。内部の covering their roots with dry leaves は前置詞 by の目的語であり、主節の目的語 O ではない。covering が動作を表し、their roots が覆う対象となる。their は the young trees を指す。with dry leaves は covering に結び付き、覆うために使うものを示す副詞的な前置詞句。dry leaves は乾いた葉を意味し、落ち葉や枯れ葉とは断定しない。

b. 全文和訳 直訳 その庭師たちは、公園にある若い木々を、それらの根を乾いた葉で覆うことによって保護した。

満点の訳 庭師たちは、公園にある若い木々の根を乾いた葉で覆い、その木々を保護した。

直訳では、主節の「庭師たちが若い木々を保護した」という内容と、by 以下の「根を乾いた葉で覆うことによって」という手段を分けて表している。

自然な訳では、「〜することによって」を「〜で覆い」と整えた。根を覆う行為が木々を保護するための手段であるという関係は変わっていない。

また、their roots の their は the young trees を指すため、「若い木々の根」として明確にした。

in the park は「公園にある若い木々」という関係で訳し、dry leaves は「乾いた葉」としている。若い木々という限定も保持している。

protected は過去形なので、「保護した」と訳す。木々がその後どうなったか、どの程度保護できたかについては述べられていないため、結果を付け加えない。

読み方のポイント

この英文では、まず The gardeners protected the young trees in the park という主節の骨格を確定する。

次に、by に注目する。by の後ろに covering という動名詞が続き、その対象である their roots と、使用するものを表す with dry leaves までが一つの内容を作っていることを確認する。

そのうえで、covering から始まるまとまり全体が by の目的語であり、by を含む前置詞句全体が protected の手段を説明していると判断する。

最後に、their が the young trees を指していることを確認すれば、「誰が」「何を」「どのような方法で」保護したのかを正確に結び付けられる。

動名詞が前置詞の目的語になる場合は、動名詞のまとまりと前置詞句全体を区別することが重要だ。主節の目的語を探す操作と、前置詞の内部にある名詞的なまとまりを読む操作を混同しなければ、手段と動作の関係を自然な日本語に反映できる。

5

a. 構造の確認

疑問詞＋to 不定詞が作るまとまりは、**what to pack for the weekend training camp** であり、文全体では動詞 explained の目的語（O）として働いている。

まず、文頭の At the morning meeting は「朝の会議で」という時と場面を表す前置詞句である。

主節の主語（S）は the coach、述語の中心（V）は explained だ。

explained は「説明した」という意味だが、何を説明したのかは、この動詞だけでは分からない。その内容を表しているのが、後ろに続く what から始まるまとまりである。

次に、まとまりの内部を確認する。

pack は「荷物を詰める」という動作を表し、what はその対象に当たる。つまり、what to pack は「何を荷物に詰めるか」という内容になる。

さらに、for the weekend training camp は「週末の合宿に向けて」という目的を表し、荷造りの目的を具体的にしている。

したがって、what to pack だけで区切らず、文末の camp までを含めた全体を一つの内容として捉える。

ここで重要なのは、**what がまとまりの内部では pack の対象を表し、まとまり全体は主節の explained の目的語（O）になる**という区別だ。

what だけを主節の目的語として切り出すと、「週末の合宿に向けて何を荷物に詰めるか」という説明内容を正しく捉えられない。

(At 〈the morning meeting〉) (M), 〈the coach〉 (S) explained (V)

〈what to pack (for 〈the weekend training camp〉)〉 (O).

M “At the morning meeting” / 時・場面 → V “explained” / At the morning meeting 全体が explained の出来事が行われた場面を示す副詞的な前置詞句。the morning meeting は前置詞 At の目的語となる名詞句。文頭のこの部分は what から始まる名詞的なまとまりには含まれない。
S “the coach” / 主語 / the coach 全体が主節の主語。説明を行った主体を表す。説明の受け手は英文に明示されていない。
V “explained” / 動詞 / explained が主節の述語の中心。過去形であり、説明したことを表す。説明内容にある荷造りが実際に行われたことまでは示さない。
O “what to pack for the weekend training camp” / 目的語 / what to pack for the weekend training camp 全体が explained の目的語。内部では pack が荷物を詰める動作を表し、what がその対象を示す。for the weekend training camp は pack に結び付き、週末の合宿に向けた荷造りという目的を表す副詞的な前置詞句。the weekend training camp は前置詞 for の目的語となる名詞句。what 単独ではなく疑問詞＋to 不定詞のまとまり全体が主節の目的語となる。

b. 全文和訳

直訳

朝の会議で、そのコーチは週末の合宿のために何を荷物に詰めるかを説明した。

満点の訳

朝の会議で、コーチは週末の合宿に向けて荷物に何を詰めるかについて説明した。

直訳では、what to pack を「何を荷物に詰めるか」として表し、その内容全体が explained の対象であることを明確にしている。

自然な訳では、for the weekend training camp を「週末の合宿に向けて」と整え、説明された内容と荷造りの目的が分かるようにした。

どちらの訳でも、At the morning meeting が示す朝の会議という場面、weekend が示す週末、training camp が表す合宿という情報を保持している。

また、explained は過去形なので、「説明した」と訳す。ただし、説明を受けた相手は英文に明示されていないため、「生徒たちに説明した」などと補う必要はない。

実際に誰かが荷造りをしたかどうかも述べられていない。説明したという事実と、説明の対象になった行為を区別する。

読み方のポイント

この英文では、まず At the morning meeting を主節の骨格から分け、the coach explained という中心を確定する。

次に、explained の後ろに続く what から始まるまとまりを確認する。what が pack の対象であることを押さえ、for the weekend training camp まで含めて説明の内容を捉える。

最後に、そのまとまり全体を explained の目的語として結び付ければ、文全体の意味が完成する。

疑問詞がまとまりの内部でどんな働きをするかと、まとまり全体が主節でどんな役割を持つかを分けて考えることが、疑問詞＋to 不定詞を正確に読むための基本となる。

6

a. 構造の確認

疑問詞＋to 不定詞が作るまとまりは、**where to install the new bicycle racks** であり、文全体では補語（C）として働いている。

まず、主節の主語（S）は The main question at the planning meeting、動詞（V）は was である。

主語の中心となる名詞は question だ。The main question は「主な問題、中心となる問い」を表し、at the planning meeting が「計画会議での」という情報を加えている。

つまり、主語全体は「計画会議での主な問題」を表している。

was の後ろには、その問題の具体的な内容を説明するまとまりが続く。それが where から始まる部分だ。

次に、まとまりの内部を見る。

install は「設置する」という動作を表し、the new bicycle racks がその対象になっている。

the new bicycle racks は「その新しい駐輪用ラック」を表し、racks が複数形であるため、対象は 1 基ではなく複数である。

一方、where は install という動作が行われる場所を表している。

したがって、where to install the new bicycle racks 全体で、「新しい駐輪用ラックをどこに設置するか」という内容になる。

このまとまりが主語の The main question の中身を説明しているため、主節の補語（C）と判断できる。

where はまとまりの内部では設置する場所を表し、where から始まるまとまり全体は主節の補語（C）として働く。

where だけを独立した場所の説明として扱うのではなく、to install 以下と結び付けて一つの名詞的な内容を作っていると考えることが重要だ。

〈The main question 〔at 〈the planning meeting〉〕〉 was
S V

〈where to install 〈the new bicycle racks〉〉.
C

S “The main question at the planning meeting” / 主語 / The main question at the planning meeting 全体が主節の主語。中心となる名詞は question であり、main が中心的な問いであることを示す。at the planning meeting は question を後ろから説明する形容詞的な前置詞句として読み、計画会議での主な問題を表す。the planning meeting は前置詞 at の目的語となる名詞句。
V “was” / 動詞 / was が主節の動詞であり、主語と補語を結び付ける。過去形であるため、計画会議での主な問題が何だったかを述べている。
C “where to install the new bicycle racks” / 補語 / where to install the new bicycle racks 全体が主節の補語として The main question at the planning meeting の内容を説明する。内部では install が設置する動作を表し、where がその場所を示す。the new bicycle racks は install の対象となる名詞句。new は新しさを示し、racks は複数形である。設置が実際に行われたことや、誰が設置するかは示されていない。where 単独ではなく疑問詞＋to 不定詞のまとまり全体が補語となる。

b. 全文和訳 直訳 その計画会議での主な問題は、複数の新しい駐輪用ラックをどこに設置するかということだった。

満点の訳 計画会議での主な検討事項は、複数の新しい駐輪用ラックの設置場所だった。

直訳では、where to install the new bicycle racks を「複数の新しい駐輪用ラックをどこに設置するか」として表し、主語と補語の関係をそのまま日本語に反映している。

自然な訳では、「どこに設置するかということ」を「設置場所」と整えた。場所についての検討が中心であるという意味は変わっていない。

また、The main question を「主な検討事項」とすることで、計画会議で中心となっていた問題であることを自然に表している。

どちらの訳でも、main が示す中心的な位置づけ、planning meeting という会議の性質、new が示す新しさ、bicycle racks が複数であることを保持している。

was は過去形なので、「〜だった」と訳す。ただし、実際にラックが設置されたかどうかは、この英文からは分からない。

また、誰が設置する予定なのかも明示されていないため、行為者を推測して付け加えない。ここで述べられているのは、設置場所が会議での主な問題だったという内容である。

読み方のポイント

この英文では、まず The main question at the planning meeting を一つの主語として捉え、was を文の動詞として確定する。

次に、was の後ろにある where から始まるまとまりを確認する。

まとまりの内部では、install の対象が the new bicycle racks であり、where がその設置場所を表す。

最後に、その内容全体を was の後ろの補語として主語と結び付ければ、「計画会議での主な問題が何だったのか」が明確になる。

疑問詞＋to 不定詞が補語になる場合は、まとまりの内部で問われている内容を確認し、その全体が主語の何を説明しているのかを考えることが重要だ。

目的語になる場合と同じく、疑問詞だけで意味を確定せず、to 以下の動作と対象を含めて一まとまりとして読むことで、文全体の関係を正確に捉えられる。